



子どもの
成長過程に
合わせた
生活・学習空間



日本で初めて義務教育として認められた私立インターナショナルスクール

幕張インターナショナルスクール Makuhari International School



◎概要
所在地 千葉県千葉市美浜区若葉
敷地面積 14,312㎡
建築面積 3,905㎡
延床面積 3,644㎡
階数 地上1階、一部地上2階
基本構想 柳澤要
設計・監理 シーラカンズ アンド アソシエイツ (CAAn + CAI)
竣工 2009年3月

2009年4月に千葉県千葉市美浜区に開校した幕張インターナショナルスクール。廊下沿いに教室が並び従来の校舎とは違い、子ども成長や行動特性に合わせて、幼稚園、小学校低学年、高学年をまとまりの単位にした空間構成が特徴だ。基本構想を策定し、設計者選定後も計画アドバイザーを務めた千葉大学准教授の柳澤要さんにお話をうかがった

UD建築
Universal Design
in
Architecture

多様な子どもたちの生活の場

幕張インターナショナルスクール(以下MIS)は、帰国子女や外国人の子どもたちを対象にした私立の学校だ。千葉市が教育特区の指定を受け、全国初の日本の学校教育法に基づいたインターナショナルスクールとして開校した。

千葉県からの依頼を受けた千葉大学柳澤研究室では、2007年春に基本構想をまとめ、同年秋から基本設計、実施設計がスタートした。

設計・監理はシーラカンズアンドアソシエイツ(CAAn+CAI)。

約15,000㎡の敷地に建つ校舎は、幼稚園と小学校低学年、高学年、そして管理部門の棟がゆるやかにつながる。子どもたちの生活、学習の場として、住宅のよ



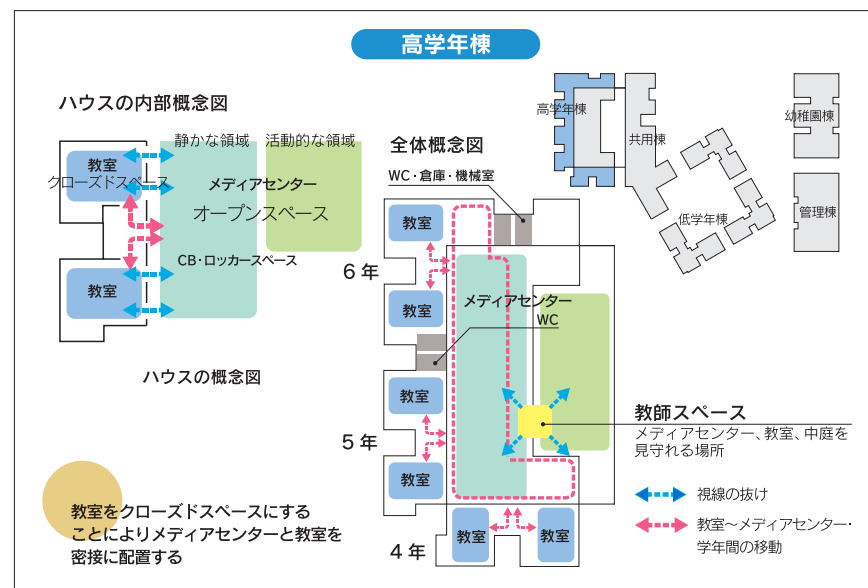
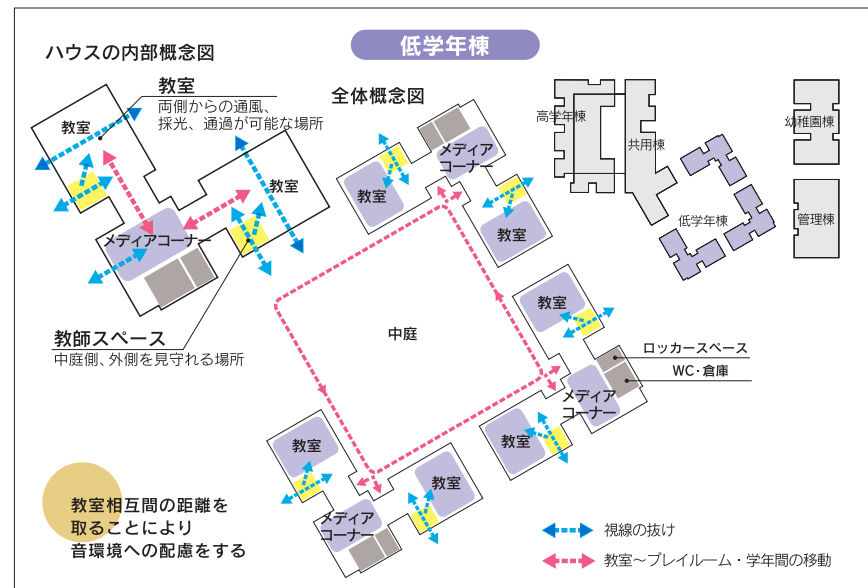
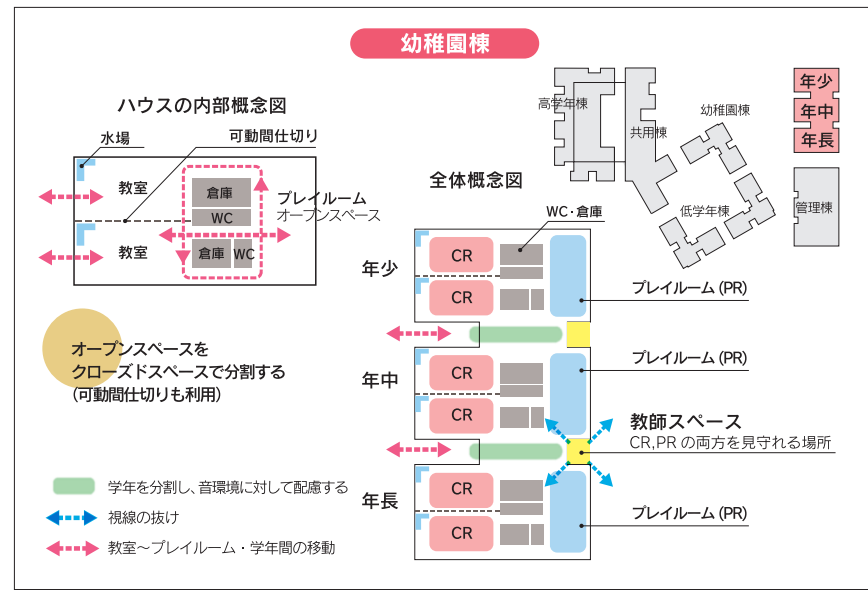
やなぎさわ かなめ ●1964年、愛知県名古屋市生まれ。1987年、横浜国立大学工学部建築学科卒業。1992年東京大学工学系研究科建築学専攻博士課程修了。1992—96年、竹中工務店東京本店設計部勤務。1996—98年、テキサスA&M大学建築学部客員研究員。1998年より現職。文部科学省調査研究委員会委員。ぐんま国際アカデミー(群馬県太田市)、日出学園小学校・中学校・高等学校(千葉県市川市)、玉造中学校(茨城県行方市)の基本構想策定や計画指導など数多くの学校施設の計画に携わる

うなスケールで、傾斜屋根の平屋建ての校舎にした。建築内外の連続性を持たせ、通風、自然採光を取り入れ、内装にも木を多用し、健康的で温かみのある空間にした。

「さまざまな国籍や文化的背景を持つ多様な子どもたちが集まる学校なので、生活や交流を重視しました。固定的なクラス集団をつくるよりは、ゆるやかなユニットにして、柔軟なグループの編成やフレキシブルな教育に対応できるような構成です」と柳澤さん。

人が集まる、お互いが見える、見られる関係をつくったり、さまざまな遊びや交流の場所を用意し、学校全体に子どもたちとのふれあいが発見されるような共用空間をつくり、生活の場としての魅力を高めた。

■各ユニットの特徴と配置



学年のまとめりとユニットプラン

幼稚園棟

- ・年少・年中・年長の3学年が各2クラス。
- ・教師の目が届き、行き止まりのない空間構成で、伸び伸びと活動できる環境
- ・幼稚園棟は、学年で1つの大きなクラスルーム (保育室) から構成される。
- ・年中、年長の教室はクラスごとにスペースをゆるやかに分節できるようにする。
- ・クラスルーム (保育室) 及び周囲には、学習・生活コーナー (実習、読書、トイレ、手洗い、教師、食事など) を充実させる。
- ・キッチンスペース、プレイスペース (読み聞かせなど) を共有で設置

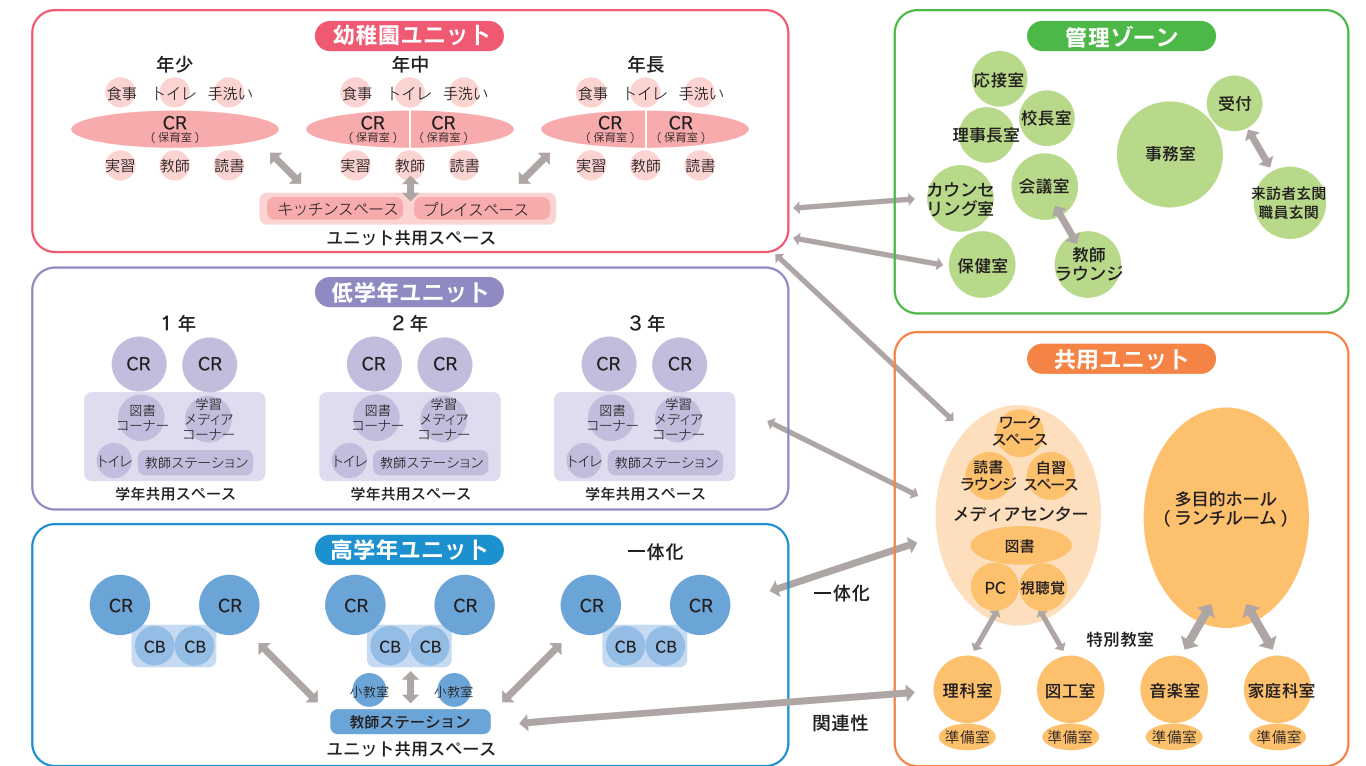
小学校低学年棟

- ・1年生から3年生までの各学年が2クラス。
- ・学年ごとのまとめりを重視し、アットホームで生き生きと学習生活ができる環境。
- ・クラスの安定した居場所としてのクラスルームを確保しながら、学年間やユニット間の交流や協力が進むように共有スペースを配置。
- ・学年のまとめりを重視し、学年 (ハウス) ごとに共有スペースとしての学習・生活コーナー (メディアコーナー) を充実。
- ・教師ステーションは、ハウス (学年) のそれぞれの教室の近くに設ける、子どもたちを集める床座スペースとしても利用。
- ・クラスルームは、オープンとクローズをコントロールできる教室にする。クローズした場合も外部からの視認性を確保する。

小学校高学年棟

- ・4年生から6年生まで各学年が2クラス
- ・特別教室、メディアセンターと密接な関係を持つクラスルーム。専門的でフレキシビリティの高い学習環境。
- ・クラスの安定した居場所としてのクラススペースを設け、教室をよりフレキシブルに利用できるようにする。また実習活動やメディアを活用した授業が多くなるので、メディアセンターとの連携 (空間的な連続性や一体性) を確保するとともに、実習教室へのアクセシビリティの良さにも配慮する。
- ・教師ステーションはユニット (ネイバーフッド) で共有する。
- ・学年 (ハウス) ごとに教室とクラススペース (ロッカースペース) で構成する。教室とクラススペースは一体的に利用できるようにし、授業中は独立して利用できるようにする。
- ・クラスルームは、オープンとクローズをコントロールできる教室にする。クローズした場合も外部からの視認性を確保する。

■ユニット構成の考え方



■ユニット構成の考え方





幼稚園様のプレイルーム



幼稚園様のクラスルーム(保育室)



低学年様のクラスルーム



高学年様のメディアセンター



メディアセンターでの調べ学習



各教室には電子情報ボードが装備されている



先生の話聞くだけでなく自分で調べる学習



メディアセンターには水場・ベンチが設けられている



メディアセンターからはクラスルームの様子が見える



クラスルームの奥には床座スペースがある



低学年様のメディアコーナー

ハウスとネイバーフッド

MISの校舎には「ハウス」と「ネイバーフッド」というコンセプトが取り入れられている。まず幼稚園、小学校低学年、高学年のそれぞれ3学年ずつをひとつのユニットとしてまとめた。これが「ネイバーフッド」だ。その中に学年ごとのユニット「ハウス」がある。学年を小さな家と見立ててそこに教員もいて設備もある。

従来の学校は、教室が独立して廊下に並んでいるが、MISでは、教室の形も一定にしないで、使い分ける。「クラス」が固定されないで、流動的なまとまりの中で学習や生活ができ、教育の自由度、フレキシビリティを高めるスタイル」と柳澤さん。

これは2005年に開校したくもん国際アカデミー(GKA)で取り組んできたことがベースになっている。GKAは英語イマージョン教育を認められた教育特区校だ。国語と社会科以外は英語を使う教育に対応した空間をどうつくるかが検討され、よりフレキシビリティの高い教育を実現するハウスとネイバーフッドのコンセプトが具体化した。

「GKAの調査を千葉大学柳澤研究室で毎年実施しています。その中で出てきた課題を見つけてGKAに空間利用の新しいデザインを変えることではない。「小学6年間で子どもは大きく成長します。それを一律に捉えて、同じ環境を提供するのは、おかしい」と柳澤さんは力を込める。さらに「年齢に応じて特色を持たせた空間づくりをして、成長に合わせた学習や生活の場を与えていくのが重要」だとも。

「スウェーデンでは、従来の均質的なクラスルームが80年代から変化してきて90年代からなくなりました。クラスという単位が解体されて、子どもたちは均一の教室ではなく、さまざまな大きさの部屋教室で自由に学習を進めます。日本では高校までホームルームとなるクラス集団がありますが、それにも限界がきて、今は変革期にあるといえます」と柳澤さんは教育の大きな変化を示唆する。

自発的な学習と ICTツールの活用

MISでは、子どもたちが主体的に学習することが特徴だ。先生が黒板の前に立つて一方的に進める授業というよりは、自分で調べ、発表することに主眼を置く。調べ学習に対応するメディアセンターやプレゼンテーションルームを高学年棟の中央に配置する他、中庭やメディアコーナーなく、随所に子どもたちの交流の場

な提案をしたり、また他の学校計画にも応用できる新しいモデルを作っていきました。MISでは、これまで実践してきたコンセプトやこれらの調査結果を反映させています」と柳澤さんは、利用者のモニタリングや評価の重要性を語る。

年齢によって異なる行動範囲

「GKAやその他研究室で行ってきた学校調査などの調査結果から、小学校低学年と高学年では、子どもたちの動きや領域がずいぶん違うことがわかりました。低学年は、考えていた以上に授業ごとの移動や居場所を変えるのはむしろすかしく、教室周囲で活動が展開されています」と柳澤さん。

そこでMISでは、幼稚園、低学年、高学年で空間構成を大きく変えている。低学年はクラスルームという落ち着ける場所があつて、そこを中心に1学年2クラスで共有するメディアコーナーをつくった。

一方、高学年は学年にこだわらず、メディアセンター(図書館の周りに教室を並べ、自由に行き来できるようにした。柳澤さんは「図書館の周りに教室を作るといふコンセプトは海外で見ても素晴らしいと思っていた」といふ。

従来型の学校建築では、学年ごとに教

自発的な学習の場を設けている。

また各教室には電子情報ボードがあり、無線LANも使える。「先生方がICTツールを上手に使いこなしています。文部科 学省のスクール・ニューテイルではICT環境の整備として、電子黒板の導入が掲げられています。が、いくら設備を入れても先生たちが効果的に使えないせなければ意味がない」と柳澤さんは指摘する。

子どもたちに背を向けて板書するよりは、教材をすばやくまた大きく表示した方が子どもの意欲・理解の度合いも違う。欧米の二先進国では、電子情報ボードを活用した学習形態が当たり前になりつつあるという。

千葉大学柳澤研究室では、この7月にMISで、登校から下校までの子どもたちの様子を観察・調査した。教育に合わせた授業場所を頻りに変えたり、自主的な学習場面が多く、日本の学校に比べると授業時間内の子どもや先生の移動回数が多いことがわかった。

ICT化で子どもたちの学習が変わってきている。自主的な学習や交流を誘発するための施設づくりは、これからの日本の学校の新しいモデルになっていくことだろう。